

「あ！萌え」の構造：序論

(7)

総合心理学部 齋藤清二

19. 「プラセボ効果」に「騙すこと」は必須か？

「萌え」の「苦痛抑制効果」についての話題から、いつのまにか「プラセボ効果」の話になり、さらにそこから「非特異的効果」という「人を喰った」話題へと、我々の乗った舟は漂流を続けている。これ以上漂流を続けていると、地球の端の水平線から流れ落ちる滝に巻き込まれて奈落の底へ落下してしまうおそれがあるので、すこし話題を引き戻すことにする。といっても本題の「萌えの探求」までには戻らず、「プラ

セボ効果」の話なのであるが。

プラセボ効果についての医学における論争や研究は、実に奇妙な状況を呈している。それは非常に重要なことであるということは、多くの人が認めているのであるが、それを正面切って話題にすることには、一種のアンビバレンス（両価的感情）があるように見える。これはおそらく、何度も繰り返し論じてきたように、医師がもっとも恐れていることは、「お前は偽医者だ（つまりペテン師だ）！」と言われることであるということに関係していると思われる。「え、それっておかしいじゃん。だって偽医者が

自分の正体を見破られるのを怖がるのは分かるけど、アンタって医者でしょ。なんでホントの医者が怖がるのよ？」とあなたは思うかも知れない。まさにそうなのだが、おそらく多くの医者にとって、「プラセボ効果を使うことも医者的重要な技量のうち」ということを認めることは、「あ、ひょっとするとアンタって偽医者？」と言われるのと区別できないことなのだろう。

このような事情にさらに話題を追加したい。統合医療（ホリスティック・メディシン）という医学の一分野にアンドルー・ワイルという非常に有名な医師がいる。統合医療をひとことで定義するのは難しいが、要するに近代の西洋医学だけにこだわるのではなく、一般には科学的ではないとみなされるような、様々な伝統的な医療の方法論や、相補代替医療と呼ばれるような幅広い理論・方法論をも取り込んで、患者の治療に役立てようという考え方の医療である。ワイルはその著書の中で、自身のホメオパシーの治療体験について触れ、「プラセボが治療効果を発揮するためには三つの条件がある」と述べている。ワイルに拠れば、その一つ目は患者がその薬の効果を信じていること、二つ目は医師がその薬の効果を信じていること、三つ目は患者と医師の間に信頼関係があることだという。これは「本来は効果のないはずのもの」が効果を発揮する時の状況（条件）をうまく言い表しているように見える。しかし、よく考えてみると、このような条件下で薬理的に効果がない物質が何らかの効果をもたらしたとしても、それを「偽薬」と呼ぶ必要はない。そこには意図的な「偽り・騙す」という行為は存在していないからである。このワイ

ルの言説は我々に有意義な洞察を与えるものではあるが、事態はさらにそれを超えてゆくのである。

20. プラセボを巡る最新の知見

ここで、もう二つほど最近報告された興味深い研究知見について触れておきたいと思う。一つは最近急速に進歩している脳画像の解析による神経科学・脳科学的な研究の結果である。いくつかの報告によれば、プラセボが患者に主観的な効果を実感させている時（例えば痛みの軽減やうつ気分の改善などが得られている時）、脳は「実薬」と「偽薬」を区別できていないらしいということである。つまり、偽薬によって症状が軽減している人の脳画像検査が示すパターン（脳のどの部位で血流が増えているか、あるいはグルコースの消費が増えているかなど）は、実薬によって同様の効果が得られている人と区別できない。つまり偽薬は、その人の主観的体験を変化させていると同時に、その人の脳に対してもそれと関連するような変化をもたらしている。そういう意味では明らかに生物としてのヒトの一部分である脳は、認知的にも生物学的にも「偽薬によって騙されている」とも言えるが、別の言い方をすれば、プラセボ効果は決して「幻」ではないということになる。

もう一つの衝撃的な研究結果は、「プラセボは、それが偽薬であることを知っている患者にも効果を発揮する」という事実である。これはにわかには信じがたいことであるが、良くデザインされた RCT（無差別割り付け試験）として実施された研究におい

て、あらかじめ「これは全く効果のない薬です」と説明しておいた場合でも、「効かないはずの薬を服用した群」に明らかに効果が認められるというのである。そうすると、患者がその薬の効果を信じているかどうかは、プラセボ効果が発揮されるための必要条件ではないということになる。どうしてそのようなことが可能なのだろうか。

実はさきほどのワイルが述べている、「プラセボが効果を発揮するために必要な三つの条件」の記述は、実はワイルがそれを思いつくにいたったワイル自身の体験とは矛盾しているのである。すこし詳しく説明してみよう。ホメオパシーと呼ばれる代替医療は、実は非常に古い伝統をもっている。ホメオパシーの理論の根底にある原則は、極めて単純化して言うと、「病気はそれを引き起こす原因と同種のものによって癒やされる」というものである。ホメオパシーには、現代の医学とは全く異なる病気の分類の仕方があり、その診断を導くための精緻で複雑な方法論がある。例えば「水銀の病気」という診断カテゴリーがあり、ある特定の症状が複数あり複数の診察所見のセットが揃っている時に、それは「水銀の病気」と呼ばれることになり、それは「水銀」によって引き起こされていると判断される。ホメオパシーの理論によれば、「水銀の病気」は「同種のもの＝すなわち水銀」によって癒やされるはずなので、患者に水銀を投与すればその病気は治ると考える。これは現代に生きている私達にとっては思考を破壊されるような論理である。だって、水銀が原因で水銀の病気になっているのに、水銀を投与することが治療となるというのであれば、病気を起こすことと治療は同じもの

ということになってしまう。しかし、一方で「毒を以て毒を制する」などという言い回しが現在でも使われているように、因果論だけによって病気を制することはできないという知識が生き残っているということの証拠にもなる。しかし、一般にはどう考えればよいのだろうか。水銀という毒によって水銀の病気が引き起こされている状態で、さらに水銀を与えれば水銀の病気はさらに悪化するだろう（有機水銀中毒＝水俣病の患者に有機水銀を与え続ければ当然病気は悪化し続けるだろう）。それなのに水銀を使うことで水銀の病気を治す。どのようにしたら、そのような矛盾が可能になるのだろうか？

ホメオパシーの理論は、この問題を以下のような原理を持ち込むことによって解決する。すなわち、水銀の病気を治すための水銀は微量であればあるほど効果がある。実際には水銀が入っている原液の一滴を一定量の水に加え、それを徹底的に振盪して希釈したら、それを一滴取ってさらに一定量の水で希釈する。これを何度も繰り返し、理論的には水銀の分子が水の中に存在する確率がほとんどゼロに近くなるまで続ける。そのようにして限りなく希釈された「水銀」の水溶液ができあがり、それを「レメディ」と呼ぶ。その水銀のレメディが「水銀の病気」の特効薬となるのである。

近代医学の常識を身につけている我々から見ると、「レメディ」は、これ以上はないくらい確実なプラセボである。このような水に生物学的効果があるということは考えられない。もしこのレメディが実際に効果を発揮するとすれば、それはプラセボ効果以外に考えられない。実際ワイルも医師で

あるから、このような理屈は百も承知していたのである。従ってワイルはホメオパシーが効くとは信じていなかった。ところが実際に西洋医学の治療では治らなかった症状が、ホメオパシーのレメディの投与によって見事に改善した。これはワイル自身が患者として体験したことである。この経験からワイルはプラセボが効果を発揮するための前述の3つの条件を考え出したのである。

しかし、賢明な読者はもうお気づきと思うが、ワイルの主張は明らかに間違っている。あるいはワイルは勘違いしている。ワイルはレメディが単なるプラセボであることを知っていた。つまりレメディの効果を信じてなどいなかったのである。また、ワイルを治療したホメオパシー医が、果たして効果を信じていたのかどうかは証明のしようがない。よって、ワイルの体験したホメオパシーによる治療（つまりプラセボによる治療）のうちで確実だったのは、ワイルとそのホメオパシー医の間に信頼関係があったことだけなのである。そうでなければワイルがホメオパシーの治療を受けることなど有り得ない。

以上のことから少なくとも次のことが言える。プラセボが効果を発揮するためには、治療者や患者がその「偽薬」の効果を信じている必要はない。必要なのは、治療者と患者の間に信頼関係があるということと、その二人の間で「何か」が行われることだけなのである。よって「プラセボ」に「偽薬」という言葉を当てるのは適切ではない。またプラセボ効果を治療に用いるということは、医師が患者を騙しているということではない。騙そうが騙さなからうが、それ

とは関係なく「プラセボ効果＝非特異的効果」は、信頼し合う治療者と患者との相互行為において生じる。それは認知的変化と生理学的変化を「実際に」伴うのである。

21. 『萌え』についての考察の進め方 についてのメタ考察

さて、延々と「プラセボ効果」についての議論を続けて来た。読者は「いったい、『萌え』の話題はどうなってしまったのか？」と思っているに違いない。さらに言えば、「この『序論』は何時まで続くのか？いつになったら『本論』に入るのか？」とイライラしておられるのではないだろうか。ごもつともである。非常によく分かる。しかし、正直言って、筆者の実感としては、これはいつまでたっても『序論』なのである。なかなか本論が書けるとい気がしない。あーでもない、こーでもない論じているうちに、もしかすると『本論』につながる何かが浮かび上がってくるかも知れないが、もうしばらく我慢しておつきあいを願いたい。そうはいつても、これまでに論じたことをある程度振り返って整理しないと、何時までたっても堂々巡りしているだけになりかねない。そうだ。その努力を試みよう。

ここまで、どちらかというと『萌え』についての「機能的側面」についての議論に時間を費やしてきたような気がする。機能的側面とは、要するに、『萌え』はどのように役にたつのか？そしてどのような害を生じるのか？ということである。整理してみよう。

- 1) 『萌え』には、強力な苦痛抑制効果がある。
- 2) その効果は、「プラセボ効果」と呼ばれるものと関連が深い「非特異的效果」と呼ぶほうがより適切である。
- 3) 上記の「苦痛抑制効果」の負の側面として、「依存」がある。
- 4) 「依存」が生じるメカニズムとして『萌え』と「似て非なるもの」との取り違えが関与している可能性がある。
- 5) 「似て非なるもの」に関連する現象として「カップ焼きそば現象」がある。
- 6) 「カップ焼きそば現象」は「プラセボ効果」が生じることと関連している。
- 7) よって、「カップ焼きそば現象」について理解することは、『萌え』の有効性を活かすとともに「依存に陥ること」をある程度防止する可能性がある。
- 8) 『萌え』を有効利用することはストレスコーピングとして有用であり、同時に「依存」をある程度コントロールすることで、有用性はさらに増強するだろう。

うーん。ちっとも整理されていないなあ。どうどう巡りの循環構造を呈しているような気もするが、一応この問題はここでいったん保留にしておく。不十分ではあるが、萌えの機能的側面の検討をいったん離れて、『萌え』の別の側面について論じていくこ

とを考えたい。

たぶん『萌え』の構造的側面について論じていくのが良いのだろうなあ。なぜなら、本稿のタイトルは「あ！『萌え』の構造」だからである（←今さら何を）。あれやこれや色々と考えているうちに、ふと思い出したことがある。昨年ある人の修論を指導していたのだが、それがとても面白いテーマで、直接『萌え』という言葉がタイトルに出てくるわけではないのだが、「母娘関係と娘のサブカル趣味の関連について」というような、とても興味深いテーマの研究論文であった。サブカル趣味のある青年期の女性に半構造化インタビューを行い M-GTA で分析するという本格的な研究なのだが、その中で、娘の語りから「関係性萌え」というカテゴリーが浮かび上がってきたのである。つまり「萌え」のパターンには、「関係性萌え」「キャラクター萌え」「ストーリー萌え」といったサブカテゴリーが抽出でき、単にあるストーリーのあるキャラにスタティックに萌えているだけではなく、そこにはダイナミックなストラクチャーがあるという一種の「構造」が浮かび上がってきたのである。

よし、今回はこれをヒントにして、『萌え』の構造的側面に考察を進めていくぞ！乞うご期待。

<続く>